











花鳥餘情第十八

藤裏葉

藤裏葉

浅草文庫

以詞為主  
右源氏世九葉此三月より  
十月より凡事んんんん梅枝を  
同年なり



此の頃のほくも  
事柄中ぬんんんあから  
く  
いんんんんんんんんんんんん  
此の頃より  
あから  
めわらるんんんんんんんんんんんん



あひまのあつとるなり

あつとるのあつとるなり

あつとるのあつとるなり

あつとるのあつとるなり

あつとるのあつとるなり

あつとるのあつとるなり

あつとるのあつとるなり

あつとるのあつとるなり

あつとるのあつとるなり

三月廿六日大坂天皇の御記

寺よまきとて終り 香部王記

兼平二年三月廿七日皇太后御極集

寺為先尊太<sup>皇太后</sup>及先<sup>人</sup>氏<sup>娘</sup>追<sup>女</sup>福

今案

すれみしあひまのあつとるなり

あつとるのあつとるなり

あつとるのあつとるなり

あつとるのあつとるなり



しつとゆりきつのみまにれあつねらる  
もせりうり 乞ふ文魯此源氏に

一 始末の事也

なげしつとあまらあつひとあれひつひ  
のけしつとあまらあつひとあれひつひ  
そらげしつ

二 藍次よこま花田次よあつ世田也

北条源二位之位の中おるしつと  
多勢の河の事おちね北条源よあつ

あつあひのらまらわつしつと  
二 花田の事也

月六日しつとあつしつと 四月十日と

上になつしつと月しつとあつしつと  
はつねしつと下月の初よ七日又月  
あつしつとあつしつとあつしつとあつしつと

とあつしつと

文籍こめも家記也しつとあつしつとあつしつと  
あつしつとあつしつとあつしつとあつしつと



此の終りなり 日たはれ終りたり

よきなりこと多等の密札のありきも  
内まきあはし恨終り知し密札は  
い子のよしなりや作人なれ  
もよに准し礼とてことと今  
れ世にも密札といひきされつこと  
うはらしものこととてことと家  
令の若ふよきこととてことと  
読あれとも純いりなりなりや

うたはれしこととてことと  
もつた初也 力等のなかり男がなれ  
あつたもあつたこととてことと  
よはまはれしものこととてことと  
しつたものこととてことと  
まはらにわかれぬりなり  
あつたこととてことと  
そつたこととてことと  
あつたこととてことと



宰相さう月とりらうさう年一記し

ふりさう 毎てまうりゆり 天盃

とゆりてい存まうりてお年

とらましこれいけいさうりゆり

ういお舅れ家礼とゆりゆり

ゆきくせんなるめれと 巡流り

いとくさう心とや

りあまゆさうあまゆさうまゆり

ゆりさうゆりさうゆりみれゆり

年ゆりさう家のとらうさうゆり

ゆりさうゆりさうゆりさうゆり

ゆりさうゆりさうゆりさうゆり

ゆりさうゆりさうゆりさうゆり

ゆりさうゆりさうゆりさうゆり

ゆりさうゆりさうゆりさうゆり

ゆりさうゆりさうゆりさうゆり

ゆりさうゆりさうゆりさうゆり

ゆりさうゆりさうゆりさうゆり



しん海もくしんたることあり  
あやふくみふらるりそれよき  
くつじ歌の丹々此脚音し海分也  
されとらしつみのみ此詞よふ  
けりやう知ちうしんうけりけり歌と  
くつを例の展轉しんく龍分り  
しりかふとをきんそとらりきりし  
色きやと海々るふ歌のわらわめ  
とらや

海そんしんもくしんきんをゆる  
けりしん海よのせう拾遺をけり  
しんもかりん海れのはしんく  
しんしんしんしんしんしんしん  
けりしん此詞のやんしんしん拾遺  
れん一首のなはらり此のなを  
のしんれしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしん







あつせ兒のあつかき

女の奇し

我らさきい名とさうろつ河口の関はあ  
らわきさうくゆかりさうりし事  
地りあし

りるんくふく<sup>下</sup>地と此岸と河はあ  
さきふのさうりせさうらん 弘仁

式云左政官符應給考降奥國  
散位三千十三人事

擬郡司廿八人白河菊<sup>ナク</sup>多<sup>タ</sup>刺<sup>セキ</sup>守<sup>モリ</sup>六十

人 自余畧之 右且國府外散位等

知<sup>チ</sup>伴<sup>バン</sup>者<sup>者</sup>宜<sup>イ</sup>兼<sup>兼</sup>知<sup>知</sup>依<sup>依</sup>伴<sup>伴</sup>給<sup>給</sup>考<sup>考</sup>

延曆十八年十二月廿日

と兼男

の也弁<sup>ハ</sup>か<sup>カ</sup>さ<sup>サ</sup>く<sup>ク</sup>ゆ<sup>ユ</sup>り<sup>リ</sup>く<sup>ク</sup>さ<sup>サ</sup>ふ<sup>フ</sup>奥<sup>奥</sup>列<sup>列</sup>の  
く<sup>ク</sup>さ<sup>サ</sup>た<sup>タ</sup>乃<sup>乃</sup>弁<sup>弁</sup>も<sup>も</sup>よ<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>け<sup>け</sup>く<sup>く</sup>人<sup>人</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ふ  
され<sup>レ</sup>も<sup>も</sup>何<sup>何</sup>日<sup>日</sup>れ<sup>れ</sup>せ<sup>せ</sup>き<sup>き</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>云  
あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>地<sup>地</sup>り<sup>り</sup>せ<sup>せ</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>り  
ら<sup>ら</sup>た<sup>た</sup>び<sup>び</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>ふ  
あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>地<sup>地</sup>り<sup>り</sup>せ<sup>せ</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>り







あらしの神のまはりて  
し



月を世ひよ神とまはりて  
河まらりてしほさるらりてけし  
海もまらりてしほさるらりてけし  
と人あさるあそとよみゆかひ  
しるん月よとらるん向ん  
まきしゆを

うらまへしゆを  
みたりぬとのけりしりしゆを

あ  
しゆを

初らりてしゆを  
終らりてしゆを  
とらりてしゆを  
とらりてしゆを

初らりてしゆを  
終らりてしゆを

初らりてしゆを  
終らりてしゆを



丁子とあれ<sup>香</sup>は<sup>何</sup>も<sup>し</sup>き<sup>あ</sup>る<sup>の</sup>は<sup>何</sup>の  
ま<sup>じ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>し</sup>と  
い<sup>は</sup>れ<sup>た</sup>田<sup>や</sup>あ<sup>わ</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>き</sup>ら<sup>り</sup>  
あ<sup>て</sup>い<sup>う</sup>さ<sup>い</sup>よ<sup>と</sup>云

く<sup>り</sup>ん<sup>の</sup>り 国史云養和七年四月八

日請<sup>ハ</sup>律師傳燈大法師位静安<sup>信</sup>信

淨友始行<sup>權</sup>佛事

ゆ<sup>せ</sup>う<sup>し</sup>の<sup>り</sup>わ<sup>げ</sup>さ<sup>ゆ</sup>よ 權<sup>信</sup>の

布施<sup>ふ</sup>の<sup>者</sup>の<sup>銭</sup>と<sup>月</sup>こ<sup>り</sup>と<sup>中</sup>比<sup>り</sup>

紙よ<sup>う</sup>な<sup>れ</sup>多<sup>り</sup>あ<sup>る</sup>は<sup>こ</sup>と<sup>あ</sup>り  
者<sup>侍</sup>ゆ<sup>り</sup>

ま<sup>じ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>し</sup>ら<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>と 五<sup>善</sup>此

さ<sup>う</sup>ま<sup>さ</sup>る<sup>ふ</sup>の<sup>女</sup>席<sup>の</sup>事<sup>也</sup>

水<sup>も</sup>と<sup>ん</sup>の<sup>い</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>世</sup>園

た<sup>い</sup>ゆ<sup>ん</sup>と<sup>ま</sup>や 水<sup>浅</sup>不<sup>通</sup>と<sup>い</sup>ひ<sup>詞</sup>

そ<sup>わ</sup>ら<sup>う</sup>ら<sup>り</sup>

山<sup>方</sup>と<sup>梅</sup>と<sup>ふ</sup>ん<sup>と</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>の</sup>

な<sup>れ</sup>を<sup>ま</sup>の<sup>店</sup>れ<sup>も</sup>あ<sup>り</sup>



わせらのさきれり

言井の房

母より

かくて赤糸院の山つと見へたらぬ  
なり 四石のあまれあまのまはら

事

多のうらみあれう海へては

しるはのこわれの眺よ海へて  
はらやしあれは玉依姫の別雷ワケイサキ  
とくえとあひしあまのまはら

は生ともかくはあまのまはらと

あつりしはつゆははれと地

己カ神ツク鏡ツクのさすとはねるのり

ゆきみちしあまのまはらと

近衛けつこの使の甲おなり

其の糸 善日糸の使 近衛けつこ

徳月を東照とこそ海へは

糸の陪坂の糸はけつこの徳月よ

よとや使のらとらと



さぬきの飯武まゝし

まんじやなれわしよありつね

あはれおのりなれ ちよ

惟光うめよわなわらり

かきしんがしめくまれ名桂と

わりしやまらん 折桂のまふ

乃しん章生あてしよと

ちよ

わししゆゆりしんまれしんりしん

あらのま 惟光れはし

うれしゆららまらん

りしんをり

いしんゆりゆりしん

ゆきのひちまれしん

そのあたらしんりしん

ゆめもあらしんりしん

らうゆりま ちよ

あつちのりしんりしん



凡云のこらりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも

いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも  
いんまらりきりきりあむも

長安天皇



溢号く位よりさかす帝の位より  
て元号つるの由さかす天皇と  
号號く位よりさかすの院号  
ありし一教の太子と小一条院と  
号せりし卯の二十例すさ事し位  
たて天皇と號せぬらりありて院号  
年友の對封<sup>ナ</sup>介し太上天皇と  
一事かす由ありしこれよりありて  
げゆ院よりと名女院よりひよる

院より事しと名と天皇よたりて  
るしありとさかすの由あり  
院の院号ありありありありあり  
封の事ら小一条院の院号あり  
封以下如元と宣下せり太上天皇  
此封の法令より定められたる  
ありし事食封ハ二十戸ありし  
延表或よのきしと道月山一系院  
ハ東文田此封とさかすのきしと



よしと厚氏の言に左殿下を  
院事と仰り給へるに左殿下の  
食封の禄令に三千石ありしに  
小一条の例として三千石ありし  
とて毎石きりしに  
つらと左殿下の子孫のふか  
きにこれに法成寺実白の  
食封とて人給へるに  
いそれの列に  
殊見らるる

六条院の御封乃事  
う宮中より  
封戸二子二百五十戸  
ひつこれ例と仰り  
改不改の二れあり  
改不改の二れあり  
補せし



じつちる例とありとありて院

司のいふいふれつる心もりや

めさみりりちの葉の菊と花あててと

さあれあしうげさや 袍衣の巻

一位深紫二三位浅紫四位深緑

六位深緑七位浅緑八位深缥九位浅

缥や 深紫の世元のあて深や浅缥

を苗のりや深缥緑八位深と并安の

て深く浅緑八位深と黄蘗とあて深く

深ハ藍あて深くと世四位袍三位深

差異あてと一糸院白曆以下り

あてさりたさわりと世交右大臣の

記よるあてり又紫とあて合はる

せりい女工あのかと記定はさるはり

ねとれつとけあはあさふりといふあて

七位衣色や五位さるをさる緑さる

一又二位三位ハ深はさるといふさ

とてあてり二位の袍の色さるはり



今しよの大概とりてしる所の事  
これと度明系族の中細云より  
時九条右大臣絶とけりしに  
云とよとけりし 京極中細云も  
淡路三位の時よの事と  
さるしよ代のもれ天のお  
二葉より者さるさるさるさ  
さるさるさるさるさるさる  
は撰也

さるさるさるさるさるさる  
花のりさるさるさるさる  
惟元 雅正 今案者さるさる  
は撰也  
中細云も  
は撰也  
は撰也  
は撰也  
は撰也  
は撰也  
は撰也  
は撰也  
は撰也  
は撰也



とつしつてとの紙

とつしつ

夕暮乃日紙の初

神の月廿日ありとのりつての紙  
康和二年十月廿三日

村上天皇の朱書院より書きたる

例とつしつての紙

とつしつての紙

とつしつての紙

とつしつての紙

単に紙と書れ

とつしつての紙

とつしつての紙

とつしつての紙

とつしつての紙

後神泉苑西脈門入所持殿丸大臣作

今捕池魚右通門持清經の臣林所捕得

莫奉覽則冲前料理供膳餘給得

臣右の仇益哉調所膳以厨を此時驛村に渡同十八



年二月廿日入神泉苑東門至馬狩  
 下塙此間凡右邊門以網捕池魚付所  
 厨子所網信及南屏場下調給侍臣等  
 及同一刻競馬同年十月八日幸朱  
 雀池為院造作及河島之凡邊國藤原  
 朝臣請捕魚依請凡右邊門官人シヤクナ  
 令昇網糸入池網前池後鯉ヒラキ斬十餘度ニケ  
 於河前調供又上東砌下調給侍臣  
 みかとう成つまりありありやく〜とほ

く〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 朝觀行幸より帛の給〜と〜と  
 皇と〜と〜と〜と〜と  
 み〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 王心取獻物事  
 と〜と〜と〜と〜と〜と  
 久〜と〜と〜と〜と〜と  
 奏







ムーのき物ともことろのらんまのり

小葉ともさうり

樂あうし作らうくくくせは

屋のり用さるるぬよやそれ大

鼓鉦鼓とさうり乱書らしあま

せらうくくくく

へのりあさひらりゆりてゆんのけり

まはれいしともせ知ん

年節會雅樂寮立葉後召和琴





